



足袋



タブ・ポイント



タブラー

白足袋を用いるのみとなってしまったが、昭和20年代までは防寒用として日常的に用い、日常履きは、別珍やコールテンでつくられた黒、紺、赤、緑などの色足袋が一般的だった。

タブ・ポイント

[Tab point]

フラッチャーで、羽根を取りつける最下部の位置のこと。

ダブル

[double]

表革と裏革との間に補強布。一般に綾織り、シード織りなどの毛羽だったフランネルや綿布などが使われる。

ダブルソール

[double sole]

二層になった本底のこと。一枚は地面に接する底で、その底と中底との間に、もう一枚入れる。堅牢な底が必要とされる労働用の靴、またデザイン上、重厚な感覚を出したい時にも用いる。

たまたし

[玉出し]

一般的にはウエルト製法において、細革とアップーの間に、革を細長く切つて折り曲げたものを差し込んで縫った縫い目。ウエルト製法以外でも、つなぎ合わせる箇所、この手法を用いる場合がある。靴に重厚な感覚を与えるのが狙いだ。

たまがち

[玉縁]

アップーの縁をまとめる手法の一つ。縁、または縁と縁とのつなぎ目を、細く切つた別の革や布テープで包んで処理する方法。

タリフ

[tariff]

足長と足囲の組み合わせを示した一覽表のこと。フィッティング可能な足の範囲を知ることができる。

タレーリア

[talaria]

踝のところをひもでくくり、その上に2枚の翼がついているサンダル式の履物。ギリシア神話のヘルメスやローマ神話のマーキュリーが、履いていたとされる。



タロン

[talon]

フランス語で、ヒールのこと。

タン

[tongue]

舌革のこと。↓したがわ

だんなおき

[弾直樹]

皮革産業創世記に活躍した、機多(え)た頭、13代弾左衛門。

江戸時代、革を作る縫製業は「長吏」「かわた」と呼ばれる人たちの仕事とされ、独自の集団を形成していたが、関東八州二部を除くと伊豆、甲斐、駿河、陸奥の一

たび

[足袋]

日本古来の履物。旅に履いた者、つまり「タビツ」から「タビ」という言葉が生まれたとされ、平安時代の書物に、狩猟や旅に履いた鹿革製の靴を「多鼻」と言ったという記述が見られる。

その後、同時代末期に、指股に緒をはさ



タン

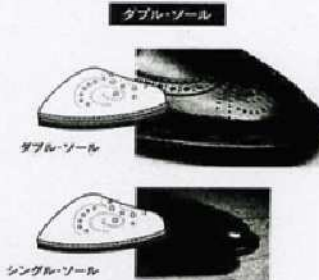
プレーン・タン

ペロウズ・タン

フリンジ・タン

エプロン・タン

ショール・タン



ダブルソール

ダブルソール

シングルソール

玉縁



んで履く鼻緒式の草鞋、鎌倉時代になると、指股の分かれた革足袋が現れ、江戸時代初期に、足首をひもでとめる布足袋が普及。その後、鯨のヒゲを細工したコハセが考案され、コハセ足袋が登場した。これらの足袋は、冬の室内で防寒のために、屋外では表付きの下駄や草履とともに、礼装用として用いられた。現在では、礼装として和服を着る際に